

## □北国なよろ『利雪親雪まちづくり』

北海道名寄市長 島 多慶志

氷点下30度のしばれ、青空に映えてきらきらと輝く樹氷、真っ白い雪像のならば街並みの中で、私たち名寄市民は、北国特有の生活と文化を創りだしてきました。

しかし、いまだ雪の寒さとの付き合いは、必ずしも十分とはいえません。私たちは「名寄の冬をいかに楽しく、快適に暮らすか」を願っています。

私たちは、一人ひとりの創意と工夫、責任と役割により、雪が多く寒い気候・風土に適した、名寄らしい魅力のある生活環境と文化の創造に努め、より快適で楽しく暮らせるまちづくりをすすめるために、この条例を制定します。

=名寄の冬を楽しく暮らす条例前文より=

例年より遅い降雪。しかし一日にしてシベリアからの寒気団により街中は白一色に染まる。

名寄市は北海道北部の内陸、日本で4番目に長い川「天塩川」の上流部に位置し、自然条件は厳しく寒暖の差が70℃(夏はプラス

35℃、冬はマイナス35℃)もある積雪寒冷の地です。

1900年(明治33年)に山形県東田川郡添川(現藤島町)から13戸が入植したのが、名寄の開拓の始まりとなっています。

開拓後100年にも満たない街ですが、交通の要衝、北海道北部の官公庁所在地、さらには教育、医療の中心地として発展をさせています。

年配の方であればご存知の通り、大相撲において「怒り金時」の名で知られた、今は亡き「大関・名寄岩」の出身地であります。幕下から不屈の闘志で関脇まで返り咲いた根性は、映画「涙の敢闘賞」ともなりました。このような不屈の精神は市民の中にも培われています。

「きらきらいきいき北の都(まち)なよろ」が名寄市の目指す都市像です。昭和62年に市民約15%以上が直接間接に参加し、第3次総合計画をつくりました。この計画策定時に、冬の生活に対する多くの市民意見を取り入れた計画が作成されました。

昭和62年に実施した市民アンケートでは、「名寄は住みよいと思いますか」という設問に対して、「住みよい」「どちらかといえば

住みよい」と答えた市民が 67.7%に達していました。

しかし一方では、「住みにくい」「どちらかといえば住みにくい」と答えた市民が 29.5%あり、このうち半数近い 44.9%がその理由として「雪が多くて寒さが厳しい」をあげていました。

高齢者が名寄を離れる理由としても、冬の生活の厳しさがあげられることが少なくありません。

昭和 63 年の在宅福祉対象者調査の報告によると、行政に対する要望として次のような回答が並びました。

「高齢者ゆえ市の除排雪のうち排雪が年 1 度では不自由しますので年 2 回は実施してほしい」「自然に積もる雪や屋根からの落雪の除雪はまだ自力でできますが、ブルドーザーで道路の雪を玄関の前や車庫の前に山のようにおいていかれるのを片づけるのには 3 時間かかり、体力の限界を超えます。名寄から離れたと思うのはこのときです。ブルドーザーによる家の前の山のような固い雪をなんとかして下さい」……以上のような市民意識を背景に利雪親雪事業の推進に取り組むこととなったのであります。

名寄市は約半年間、雪と氷に埋まる都市です。市民が戸外でスキーや雪像を作って楽しむ素地はありましたが、市民意識の中にどうすればやっかいものの雪の概念を少しでも和らげることができるだろうか。そこからの始まりで、雪を利用し雪に親しむ冬の生活を楽しむ意識を育み、北国のまちづくりを推進するために「雪と寒さに強いまちづくり」「冬を楽しむまちづくり」に努めていかなければならないと痛感していま



写真 1 商店街での投雪作業

した。

冬期間における生活環境の向上と産業活動を支える安全で円滑な道路交通の確保は一層重要であります(写真 1)。

さらに生活様式の変化や高齢社会を迎える中で、市街地においては幅員の狭い道路のカット排雪や高齢者、障害者世帯の門口除雪をおこなってきましたが、除排雪に対する市民要望も多様化し排雪を望む声が高まり、行政とともに町内会など地域ぐるみの除排雪体制づくりが課題となっていました。

昭和 63 年には冬の快適環境づくり等を柱とする第 3 次総合計画を策定し、翌平成元年には北海道新長期総合計画の戦略プロジェクトの一つである「利雪・親雪プログラム」を推進する拠点として「利雪・親雪モデル都市」第 1 号の指定を受け、これまでも取り組んできた雪と寒さを克服するまちづくりをさらに発展させることとなったのであります。

雪に親しみ、雪を活用して楽しみ、北国ならではの生活文化を築こうと市民参加のも

とに『名寄の冬を楽しく暮らす条例』が制定されました。それは交通、情報、住宅、街区、生活文化、公園利用等を通じて、雪と寒さを克服するまちづくりの施策を進める方策として、単に冬の厳しさの克服にとどまらないうまちづくりの「精神」を示したものとなりました。

行政がおこなう施策の実施にあたっては、「高齢者や障害者に配慮し、行政と市民がそれぞれの責任と役割を整理分担し、共同でことにあたること」の2点がしっかりと確認され、明記されたことも意義深いことです。

雪と寒さに強いまちづくりでは、冬に強い住宅の普及と冬の快適な道路空間づくりがあげられ、「高断熱高気密住宅」「外断熱工法」「北方型公営住宅」「名寄方式融雪溝」「融雪装置設置制度」「町内会除雪ボランティア」など市民の参加による除排雪作業は、雪に対する意識の転換や近隣同士の連帯を見直すきっかけとなるものでした。

また、冬を楽しむ暮らしづくりは、冬を楽しむ機会づくりと冬の生活文化の振興であり、「四季を通じた公園利用」「冬季スポーツ施設の整備充実」「ミニ雪像コンテスト」「北の天文字焼き」「歩くスキーの普及」「除雪ボランティアの育成」「名寄市ホワイトマスター制度」「厳寒ゆえの自然現象」「冬の学校教育・社会教育の充実」「北方圏都市との交流」「光のある景観づくり」「北国の衣食遊生活の普及」などを通して市民の自主的活動が推進され、地下水を利用して道路の雪を融かす工夫や、冬のスポーツの振興を通しての戸外に出る意識づけは着実に浸透しています。

これまでの冬についての市民意識を進展させ、平成10年から始まる第4次総合計画の中では『なよう冬プラン(利雪・親雪)』、『除排雪』としてスタートします。

ここで、第4次名寄市総合計画「暮らしやすい冬の創造」における施策の具体的な考え方を述べてみます。門

#### (1) 冬を楽しむ暮らしづくり

- ・「名寄の冬を楽しく暮らす条例」を推進し、雪や寒さを生かした特色ある生活・文化の創造に努めます。
- ・北方圏の国々や地域間での生活・文化・学術・技術・スポーツなど多様な分野で交流活動を推進します。

#### (2) 冬に強い住宅の普及

- ・高断熱・高気密はもとより、雪処理に適した住宅や敷地利用、冬の景観に映える美しい街並みへの配慮、冬を楽しみゆとりのある住宅づくりを支援します。
- ・北国の風土にふさわしい街路・建物・装置・公園・緑地などを、総合的・複合的に整備する北方型街区づくりをすすめます。

#### (3) 冬のスポーツ・レクリエーションの振興

- ・市技スキーの普及推進と冬季スポーツ施設の整備充実をすすめ、スポーツ団体等の育成を図ります。またスポーツイベントの招致、実施支援に努め、冬のニュースポーツ・アウトドアライフの紹介と普及に努めます。
- ・スポーツ・レクリエーション施設の活用機能を充実し、通年利用型の施設整備をすすめます。
- ・「雪と寒さに強い公園づくり」「雪や氷と遊べる公園づくり」「冬的美しさを味



写真2 道路の排雪作業



写真3 道路の除雪作業

わえる公園づくり」をすすめます。

#### (4) 雪や寒さを生かした産業の振興

- ・北国らしい景観を配慮し消融雪システムを導入した冬に強い個性的な商店街づくりをすすめます(写真2)。
- ・地域資源・気候・人材を活かした地場産業の育成強化を図り、新しい産業の創出と企業の誘致を図ります。
- ・在市研究機関等との連携により様々な技術集積の利活用を図るとともに寒地技術研究機関等の誘致をすすめます。
- ・ピヤシリ周辺の観光資源の活用と充実を図り、自然・健康・スポーツが調和し

た施設整備をすすめます。

- ・雪質日本一フェスティバル等の冬季観光イベントの振興を図ります。

#### (5) 冬の快適な道路空間づくり

- ・道路空間は冬期間の交通安全の確保に大きく関わり、快適な市民生活を維持するため効率的な除排雪に努めます(写真3)。
- ・施設整備をすすめる無雪街区の創造に努めます。

#### (6) 除排雪体系の充実

- ・除排雪機械を計画的に更新するとともに、除排雪に際しては地域の路線に合った機械配置と雪捨場の確保により作業の効率化を図ります。

#### (7) 除排雪活動の確立

- ・市民の協力のもと堆雪スペースの確保を図ります。
- ・行政と市民の連携・協力で総合的な除排雪体制を確立し、除排雪水準の向上に努めます。
- ・高齢者世帯など除雪弱者に対し、地域ぐるみのボランティア活動を促進します。

- ・快適な冬の住居環境の確保のため、一般住宅等に設置する融雪槽やロードヒーティングに対して無利子資金を貸付け、その普及に努めます。

#### (8) 消融雪システムの調査研究

- ・下水処理水やごみ焼却施設の廃熱利用など、新たな消融雪システムの調査・研究を進めます。

名寄市の利雪親雪推進事業は市民の活動を基礎に発展してきました。

まちづくりは市民が主人公であり、とりわけソフトの部分では市民の相互協力が不可欠であります。

市民の活動による「雪と寒さに強いまちづくり」「冬を楽しむまちづくり」が、重要な目的であることを今まで以上に強く意識することができ、私たちは市民の活動や公共施設の建設、融雪溝や除雪機械の導入などにより、それを活用する住民組織コミュニティの確立が、冬の暮らし方を含め地域の条件に相応しいものと考えています。

市民独自の活動が欠かせないものとして地域ぐるみで取り組み、さらに多くの市民を参加させるという姿勢をもつことの必要性。施設や機械の導入までで事業を良しとするのではなく、設置後の利用のあり方、活用を支える住民組織の育成などを展望した、地域の実態に立脚した創造的な政策展開が求められます。



写真4 利雪親雪事業の一つ「歩くスキー大会」

まちづくりの目的は、市民の豊かさや参加を高めることです。

冬を考える意識も少しずつ生まれ、冬を楽しむイベントも増えてきています。雪を利用し雪に親しむ暮らしづくりが進んできたといえます(写真4)。

利雪親雪は永遠のテーマです。

耐える冬から豊かな冬へ、行政と市民が一体となった克雪への努力は、これからも続けていかなければなりません。

冬の生活がより豊かになり楽しくなるよう、積雪寒冷を活性化のバネとして、雪や寒さをプラスのイメージに変えながら利雪親雪のまちづくりをすすめていきます。